

## シンポジウムを終えて

子どもの貧困の現状に対し、どのように取り組んだら良いのかを深く考えさせられるシンポジウムであった。

以下は、このシンポジウムに参加した方々からの感想である。

### (当日配布アンケートより)

- 子どもの貧困に関して大いに関心を持ってきましたが、パネラーの方々や学生さんのボランティア活動から話してくださる状況や事例は、改めてリアルに感じられて良かったです。湯浅さんのお話からは、実践者・活動家としてどうあるべきかという点に関して、有意義な教えを得た思いがします。こうした集まりをきっかけに、また一つの輪、つながりが出来ればと願っています。
- 参加者全員が、この問題について学びたいという熱意があることを感じられる講演でした。それぞれの発言者が各自のフィールドの上に立って話をされていたことで、生の情報を多角的な視点で知ることが出来ました。これからの働き方、生き方の一助としたいと思います。
- 子どもの貧困の現状や、私たちがどう行動していくかについて詳しく理解することが出来たので良かった。特に印象的だったのは、「対個人への行動として行われている学習支援や子ども食堂などはあくまでツールであり、本来の目的は子どもを生活者として見て、その子について知ることである」という部分だ。この意識を持ちながら私も行動していきたいと思う。
- これから、新聞・テレビなどを見て、マスコミに対して良かったことなどを発信していこうと思います。何かを変えることは、やはり足元と同時に外へも伝える努力が必要なのでしょう。良い話、元気になった話、「希望を語る場」に参加でき、感謝しています。貧困になったのは、親の責任だったり、社会に原因があったりして、子どもには責任がないでしょう。子どもにとってそのことは不運かもしれないけど、社会や国はそのことでその子たちを不幸にしてはいけない義務があるでしょう。そういうことを国民が沢山理解していくには、湯浅さんがまとめた3つの行動（対個人・対社会・対政治）をもっと宣伝しましょう。